

ドミニコ会における真理の探究

—『真理の喜び』からの一考察—

LA BÚSQUEDA DE LA VERDAD EN LA ORDEN DOMINICANA

— Una Reflexión a partir de *VERITATIS GAUDIUM* —

宮 武 信 枝

要旨

ドミニコ会のカリスマは「真理」、ドミニコ会の大学である聖カタリナ大学の建学の精神は「愛と真理」であり、創立者聖ドミニコの帰天 800 年の聖年を契機として、あらためてドミニコ会およびドミニコ会の大学における「真理の探究」の使命について省察を試みた。

まずドミニコ会の関連文書から、元総長ティモシー・ラドクリフが修道会創立 800 周年を記念した 2016 年に行った講演「大学とその草創期と今日における社会的役割」のほか、総長当時の書簡等、そして教会公文書からは、現教皇フランシスコが 2017 年 12 月 8 日付けで発表したカトリック大学の刷新に関する使徒憲章 *VERITATIS GAUDIUM* (『真理の喜び』) 序文等を中心に参照し、考察した。

考察を通して、理論と実践の相互作用による真理の探究、現代の状況においてイエス・キリストのメッセージを伝える福音宣教、社会の諸課題に関して専門をまたぐ学際性と種々のレベルでの対話、ネットワークの構築、社会的弱者の優先等が、特に大学に要請されていることが明確になった。

キーワード：ドミニコ会、真理の探究、理論と実践、大学、福音宣教

はじめに

説教者兄弟会（ドミニコ会）では、創立者聖ドミニコ・デ・グスマン（1170 年スペイン・カレルエガ～1221 年イタリア・ボローニャ）の帰天 800 年を記念し、2021 年 1 月 6 日から 1 年間「聖年」を祝う。会のカリスマは「真理」、ドミニコ会の大学である聖カタリナ大学の建学の精神は「愛と真理」であり、この聖年を契機として、あらためてドミニコ会およびドミニコ会の大学における「真理の探究」

と福音宣教の使命について省察したい。

そこで、第 85 代（在任 1992-2001 年）総長ティモシー・ラドクリフが、修道会創立 800 周年を記念した先の「聖年」、2016 年に行った講演「大学とその草創期と今日における社会的役割」をもとに、総長当時の書簡を加えて考察する。また教会公文書から、現教皇フランシスコが 2017 年 12 月 8 日付けで発表したカトリック大学の刷新に関する使徒憲章 *VERITATIS GAUDIUM*（『真理の喜び』）序文等を中心に参照し考察していく。

1 ドミニコ会の 800 年——「真理」の理論と実践

ドミニコ会元総長ティモシー・ラドクリフは、修道会創立 800 周年を記念した 2016 年 4 月 7 日から 9 日までスペイン・サラマンカ大学で開催された国際会議『母校、大学のきのうきょう——ドミニコ会の 800 年と大学』において、「大学とその草創期および今日における社会的役割」をテーマに基調講演を行った。その中で、大学の社会的な役割を分析するにあたり会のカリスマである「真理」を講演の核心に位置づけ、真理の概念について理論と実践の両面を結合させていることに、ドミニコ会のカリスマらしさが表れている¹⁾。ドミニコ会は、研究・教育による知識としての真理と、預言的体験としての真理とを相互作用させ、理論と実践の相互に支え合う働きをもつ二つの現実と対話しながら真理を探究してきた。

元総長は、個人的な体験を分かち合いながら、会の探究する「真理」の特徴とカリスマの礎となった最重要人物を提示しており、それを軸にして考察する。

(1) ドミニコ・デ・グスマンとトマス・アクィナス

真理への問いは、ドミニコ会創立者、巡歴の中で真理を探究したドミニコ・デ・グスマン（1170 年スペイン・カレルエガ～1221 年イタリア・ボローニャ）と、大学において偉大な神学の著作を著したトマス・アクィナス（1225 年イタリア・ロッカセッカ～1274 年イタリア・フォッサノーヴァ）で始まった。ドミニコ自身が携わった原初会憲、後継者の手による伝記・創立史などドミニコ会の初期の文書の中に、「真理」のことばそのものは目立たない。またドミニコの著作はごくわずかな手紙しか残されておらず、創立者は会の精神である真理をことばよりも生きた姿で残したといえよう。ドミニコ会のモットーは、会の中で通常「神を観想し、観想したものを他に伝える」（ラテン語で“*Contemplari et contemplata aliis tradere*”）と表現されており、「真理」（*veritas*）のことばは入っていないが、時に「真理である神を観想し……」と補足している場合もある。このモットー自体の由来は、よく知られているとおり聖ドミニコではなく聖トマスである。

トマスは『神学大全』で修道会の多様性について論じ、活動生活の二通りの活動のうち「一つは、

観想の充満から発する活動であって、例えば、説教や教授などである。……これは、単なる観想に優る」とした。「すなわち照らすことが光るだけよりも優れているように、同じく、観想したものを他に伝えることは観想するだけよりも優れている」という部分がモットーの起源になった文言である²⁾。目指すものは観想と活動のいわば調和と融合、循環であり、それが真理の探究においては理論と実践の相互作用となって生きるといえよう。

さて、ドミニコは馬から降り、世のただ中に入り、異端アルビ派の人々とともに食事し、対話し、彼らの世界と必要を理解しようとした。いつくしみの説教者であるために養成が必要であると悟り、兄弟たちをヨーロッパの主要な大学に派遣した。よく見えるためには、明確に思索することが要求されるのである。さらに、第2代総長ジョルダン・ド・サクスは、ドミニコについて、彼は心の謙遜な知性によってすべてを理解したと言っていた。

ドミニコ会の霊性は、現代のドミニコ会士フェリシシモ・マルティネスによれば、「開かれた眼」の霊性であり³⁾、賢慮に満ちた眼となるために、何も見過ごさず、配慮を失せず、最も苦しむ人々とともにいることである。元総長は言う——「私たちの勉学は、目を開く真理に満ちた学問でなければなりません」⁴⁾。別の会員グリス・マクペイは、ドミニコ誕生の地スペイン・カレルエガで開催された総会の際、次のように発言したという。

ドミニコはバレンシアの飢えに、トゥルーズの宿の主人に、ファンジョーのある婦人たちの状況に、涙を流すまでに——そして行動するまでに——心を動かされました。しかし、彼の涙を説明するにはこれだけでは足りません。涙は、何ごととも見過ごさない、開いた目の霊性の学問から流れ出しました。真理はドミニコ会のモットーです——守備ではなく（しばしば、そのようにとられますが）むしろ洞察です。そして、物事を見過ごさないように目を開いていることは、目を生き生きとしたものにします⁵⁾。

真理を完全に捉えるというのは困難であり僭越であろうが、少しでもそれに近づこうと努めるなら、知識・知性ばかりでなく、虚心坦懐に、偏見や先入観で曇っていない「開かれた眼」、細やかな観察眼、豊かな人間性と柔らかい感受性からくる深い洞察力が必要であり、ドミニコはそれを備えていたわけである。

次に、トマス・アクィナスはドミニコの帰天後間もなく生まれ、彼の思想と神学は、ドミニコが始めた宣教を支える偉大な支柱となった。恩恵は自然を破壊せず、人間を体と魂との一つの全体として理解した。また、感覚の中で最も深い手で触れるという感覚が先になれば、頭の中には何もないと考えて、この世を生きた。

イエスという受肉した神によって人間は神に触れる感覚を覚え、イエスは最も打ちのめされた人々、

重い皮膚病の人々、病者、物乞い、さらに触れられることを恐れている人々に手を触れた。手で触れる感覚は視覚と密接に結びついており、時に視覚を補い、手で触れない人は見えない。あらゆる知識は、抽象的でもなく私たちが関わる物事と隔絶したものでもない。聖ドミニコと聖トマスはここに集中し、神学は世界に触れる体験を呼び起こす。明るい視野と開かれた眼には、手で触れる感覚と責任が必要である。

ある人々はよりドミニコのように、他の人々はよりトマスのようである。しかし、真理の探究には、相互作用する二つの現実を支える共同体がある。「ひとりで神学をすることはできません。今日、誰もひとりであらゆる分野の学問に熟達することはできないからというだけではなく、神のみことばの理解は一つのコミノテ [共同体] の建設なしにはできないからです」⁶⁾。文字通りで端的な例では、1890年にドミニコ会がエルサレム聖書研究所を設立したことが想起される。「聖地は第五の福音書」とも言っていた創立者のドミニコ会士マリ・ジョセフ・ラグランジュは、このエルサレム聖ステファノ修道院修道共同体と研究所で観想と活動の生活をし、諸分野の学問を結集し、「神のみことばの理解」すなわち聖書研究に取り組み、現代聖書学の基礎を築いたのである⁷⁾。

(2) バルトロメ・デ・ラス・カサスとフランシスコ・デ・ビトリア

16世紀エスパニョーラ島に関しては、聖ドミニコにかわるバルトロメ・デ・ラス・カサスと聖トマスにかわるフランシスコ・デ・ビトリアとがいた。また、アントニオ・デ・モンテシーノスは、共同体の名のもとに有名な説教を行って先住民インディオの状況を告発した⁸⁾。

ラス・カサスは、インディオに対して犯された不正義を細かく記録し、何度も虐待されるインディオのうちにイエスを見て起こっている事実の証人となり、聖ヨハネのように、「私たちが目で見たもの、手で触れたもの」を告げた。こうして、ラス・カサスは、スペイン国王に手紙を送った。何百年ものちの現代、影響を受けてドミニコ会士となったグスタボ・グティエレスは、体験がカギであると語った。体験はあらゆる事柄の教師であり、ラス・カサスの眼を通してインディオの苦しみを見た。しかし、はっきりと見るためには、体験そのものだけでは十分ではなく、よい証人となるために勉学し体験を深化させなければならない。この時代における理論と実践の相互作用に関連して、ラドクリフ元総長は書簡でも言及している。

私たちの希望の言葉は、それが神のみことばの真剣な勉学と、現代社会の分析に根ざすものでなければ、権威を持たないでしょう。1511年に、モンテシーノスは、アメリカインディアン弾圧に対するあの有名な説教をし、次のように質問を投げかけました。「彼らとて、人間ではないか？ 理性のある靈魂を持っているではないか？ あなたがたは自分自身を愛するように彼らをも愛さなければならないのではないか？ これが分からないのか？ これを理解しないのか？」モン

テシーノスはこのようにして、同時代の人々に目を開くよう、そして世界を今までと違った目で見よう招きました。明確にするためには同情するだけでは足りません。征服者の間違った神話を通して見るためには、厳しい勉強が必要でした。そしてこの勉強が、ラス・カサスの預言的姿勢の源泉でした⁹⁾。

ラス・カサスは、手元に本を携え、人権を守るために使った。その人権は、ビトリアが擁護したように、人間であるという事実によってあらゆる人間が持っているものである。この人権によって、ビトリアはインディオの上に君臨していた王と教皇の特権を否定した。そして、ビトリアの神学とバルトロメ・デ・ラス・カサスの預言的な活動とが互いに補い合っていることを、後述のシュヌの注釈も引用しながら強調している。

シュヌは、次のように注釈していました。「この国際法の最初の偉大な教師の純粹理論の教義（神聖ローマ帝国の境界の外に国々が生まれ始めたこの時代に）と、ラス・カサスの福音主義との出会いを注意してみると、非常に暗示に富んでいる。神学者はビトリアにおいて預言者を包み込む」。

この世界の不正義に憤慨するだけでは足りません。この不正義の原因の厳密な政治的、経済的分析に根ざす時に始めて、私たちの言葉は権威を持つものとなるでしょう¹⁰⁾。

現代も種々の場面でいわゆる「エビデンス」を明確に示すことが要求される。神からの「預言」や預言者を全く同様に考えることはできないにしても、神学に裏打ちされた預言は、預言者の独善でも感情的なものでもないという真正性を示すことになるろう。

(3) マリ・ドミニック・シュヌとイブ・コンガール

20世紀半ばの労働者の世界は、コロンブスや植民者の時代の世界と同じくらい、それまでとは異なる様相であった。このとき、教会は労働者から離れてその近隣を不在にしたため、フランスのドミニコ会士マリ・ドミニック・シュヌとイブ・コンガールは、工場に入ってその世界を知ろうとした。労働者の人生、人々、生活様式を知らなければならず、教会はこれらの人々の生活のただ中に現存しなければならなかった。多くの司祭がスータンを脱ぎ労働司祭となったが、この世界に現存するには、神学的な考察を必要とした。こうして、シュヌとコンガールは、ドミニコとトマスのように、バルトロメ・デ・ラス・カサスとフランシスコ・デ・ビトリアのように、理性をもって、思索をもって探究した。

ラドクリフ元総長は、書簡でも「第二バチカン公会議の準備の大きな部分はソーショワールの兄弟たちのコミノテで行われ、彼らは特にコンガール、シュヌ、フェレを中心として共に働き、洞察を分かち合いました」と述べ、シュヌについての個人的な体験も分かち合っている。

私がパリで過ごした年の最も強い思い出の一つは、フレール マリ・ドミニック・シュヌについてです。彼は、いつも出会うすべての人から何かを学ぶことに貪欲な先生でした。何も知らない

若いイギリス人ドミニコ会士からさえも学ぼうとなさいました。しばしば彼は夜遅く司教と、学生と、労働者と、或いは芸術家たちとの会合から帰り、幸せそうに彼が学んだことを話してくれました。そして私たちに、今日学んだことをお聞きになりました。真の教師は常に謙遜です¹¹⁾。

理論と実践の相互作用ということは、真理の探究における謙虚さ——真理の前での謙虚さと人間的な謙虚さ——を求めるものでもあろう。つまり、理論が単なる「机上の空論」でも「象牙の塔」の所産でもないなら、実践に耐えうるもの、いわゆる「現場」を尊重し練り上げられたものとならなければなるまい。また実践する立場の場合は、単なる「現場至上主義」でも独善的な活動でもないなら、検証に耐えうるもの、ふり返りと裏付け、よりよい方法等の学びによって向上を図るものとならなければなるまい。いずれにあっても、自分がすでにあらゆる真理を理解し手にしているような態度ではなく、常に碎かれながらへりくだって真理を求め続ける姿勢、真理という同じ目標に向かい、種々の差異を乗り越えて人を尊敬し対話しともに歩むことができる姿勢である。

元総長は、在任当時の会員向け書簡の中で神学の場合に関して次のように強調している。

聖書学者が、司牧の兄弟がしている経験を理解するのを助け、司牧経験をしている兄弟が、学者が神のみことばを理解するのを助ける時、よい神学が生まれます。私たちの神学の伝統を取り戻すには、私たちがより多くの兄弟をいろいろな学問分野で養成するというだけでなく、一緒に神学するということが求められます。……私たちは、どこで神学をするのでしょうか？ 私たちは大きな神学部や図書館を必要とします。しかしまた、別な状況のもとで、正義のために、或いは、他宗教との対話の中で、或いは貧しいスラムや病院で苦闘している人々と共に神学がなされるセンターも必要です¹²⁾。

以上ドミニコ会 800 年の歴史の中で、トマスは偉大な聖人として創立者ドミニコとしばしば並び称される。時代の近さだけによるのではない。ドミニコが開いた托鉢修道会員の教授職の道を通して、トマスはキリスト教思想を代表する卓越した神学者、哲学者として知られるようになり影響を与え続けている。特にドミニコ会では、上述の 16 世紀の会員、20 世紀半ばのフランスの会員も含め、伝統的に聖トマスの神学を重んじ、真摯に学び、インスピレーションを受け、それを時の世界の状況下で生き受肉させてきた。

トマスの偉大さは、あらゆる真理をものにしていたというのでも生存中の膨大な著作にあらゆる答えを持っていたというのでもない。有名なエピソードでも知られるように、若い頃は「無口な牛」とからかわれ、晩年自らは著作のすべてを「藁しべ」と語った。しかし、トマスは「卓越した神学者であり哲学者……同時に何よりも聖なる人」であり、「彼の知性の源泉は聖性」と評されてもいる¹³⁾。「トマスの写本の行間にしばしば祈りが見出され」、まさに「トマスの哲学と神学の思索の成果は祈りの果実」だったのである¹⁴⁾。また、「説教は神学者として、また説教者兄弟会（ドミニコ会）の一員として

のトマスが最晩年まで自らの大切な任務として力を尽くしたこと」であった¹⁵⁾。「トマスが単に優れた学者であったばかりでなく、それぞれの人間がそれぞれの状況でいかにキリスト教的な生き方をなすうかに多大の関心を寄せ、人々の教化にいかに腐心したか」¹⁶⁾、すなわち、トマスが自らの限られた生の時と場で真理を深く探究し生きたことで、後に続く人々によって各時代に適用され結実していく普遍性を帯びたところに偉大さがあったといえる。

2 第2バチカン公会議後の大学——真理の探究

(1) 教育と大学をめぐる教会諸文書

第2バチカン公会議以降のカトリック教会において、真理を探究する使命の一端を担う教育および大学に関する公会議文書・教皇文書・教皇庁文書（特に、カトリック教育省）等の諸文書が発出されている。2014年4月7日には、第2バチカン公会議『キリスト教的教育に関する宣言』50周年と『カトリック大学憲章』25周年である2015年の記念式典を準備し、指針とヒントを与える文書として、カトリック教育省から『教育の今日と明日——新たなる情熱——（討議要綱）』が発信された¹⁷⁾。この文書は、表題のとおり大学を含め教育全体の流れと教会による教導の内容を振り返りつつ、将来に向けた課題を提起したものである。ここには関係各文書の概要と解説が総合されており、それを参照しながらたどっていく。

第2バチカン公会議の中心的な文書に『教会憲章』（1964年11月21日公布、略号LG）、『現代世界憲章』（1965年12月7日公布、略号GS）があり、キリスト教教育関連の事項については、1965年10月28日、『キリスト教的教育に関する宣言』（略号GE）が公布された。これら3つの文書は相互に関連している。教育は、十全な人格と文化の発展に向けられた普遍的権利、共通善であり、キリスト教的教育は福音宣教・ミッションであると同時に人間教育ともなる必要があることに触れている（LG n.17、GS n.60-62、GE n.1-2）。たとえキリスト教的特質を尊重するとしても、信仰生活が人間生活における他の活動と切り離されて経験されたり認識されたりするような事態は回避しなければならず、また、キリスト教的教育において、貧しい人々のための貧しい教会（LG、n.8）という信仰に目を向けることが強く促されている。これは教会の重要な今日的メッセージの一つでもある。

『キリスト教的教育に関する宣言』は、第10項を「カトリック大学」に向け、「カトリック大学、またはその学部が世界各地に適宜に配置され、発展すること、しかもそれらの大学が数よりも学術研究に卓越したものとなるよう勧告する」とした¹⁸⁾。その大学に関する展望がこう述べられている。

教会は、その管轄下にある大学、学部では、それぞれの学科が固有の原理や方法に従い、また学

問研究独自の自由をもって培われるよう、合理的に組織されることを願っている。それにより学問の理解は日々いっそう深まり、現代の進歩によって提示される新たな課題とその研究成果は慎重に究明され、教会博士、とくに聖トマス・アクィナスの手本に倣って、信仰と理性がどのように一致して唯一の真理に達するかを、より深く見極めることができるようになる。こうして、確かに、より高度な文化を目指すあらゆる知的分野に、キリスト教思想が公的な、また不断の、そして普遍的な影響を及ぼすことになる。また、これらの教育施設で学んだ学生は、真の学識に精通した人間、社会において重大な任務を果たし、世における信仰の証人となる用意のできた人間として育成されていく¹⁹⁾。

ここで、聖トマス・アクィナスがカトリック大学において真理を探究する学術研究の「手本」として挙げられている。「唯一の真理」という用語は、この言葉だけを取り出すなら教会のみが真理を独占しているかのような印象を与え、やや抵抗を覚えるかもしれない。というのは、古くは「救いは教会にのみ」といった考え方や表現があった影響もあるろうか。しかし、ここで「唯一の真理」というのは、カトリック大学の存在理由でありキリスト教思想の究極的な基礎であるイエス・キリストを前提としての用語と考えられる。

1990年8月15日、教皇ヨハネ・パウロ2世は使徒憲章『カトリック大学憲章』を發布し、カトリック大学の重要性に対して人々の注意を促すことを目指した。憲章第30項では、「大学の基本的な使命は、研究を通して絶えず真理を探究し、かつ社会のために知識を保存・伝達することであるが、カトリック大学は、この使命に参加しつつ、独自の特徴と目的を生かすのである」²⁰⁾とし、真理の探究という大学の使命を明確に打ち出している。また第32項では、カトリック大学が、「人間の生命の尊厳、あらゆる人々への正義の実現、個人的・家族的な生活の向上、自然の保護、平和と政治的安定の追求、世界の資源の公平な分配、国家的にも国際的にも人類の幸福に資する経済的・政治的秩序の創出」といった領域における研究によって、「現代の重要問題」に奉仕する使命も持っていると言った。さらに真理の探究に関して、「カトリック大学は、社会の真の幸福を守るために欠くことのできない真理については、もし必要なら、たとえ世人にどれほど不愉快がられようとも、勇気をもって語らなければならない」と、時流に逆らうある種の厳しさをも求めている²¹⁾。

『カトリック大学憲章』については、『教育の今日と明日』I-2でふり返られている。そこで、ヨハネ・パウロ2世が大学教員に対して強く訴えたこととして、「自分たちが取り組む研究が持つ倫理的道德的意味に気づくこと、その際には孤立的排他的アプローチを避けて物事を総合的にとらえる視点を発展させるために、各学問分野の規範と方法論を損なうことなく、異なる学問分野間の対話を推進すること」を挙げている。そして神学については、「神学は他の学問分野が自らの研究活動の動機・意義を掘り下げることの助けとなりうるし、同時に神学研究は他の学問領域に刺激を受けることによって、

生きる上でのさまざまな問題に言及し、世界への理解を深めていくことが可能になる」と説いた²²⁾。やはり、学問研究の倫理性と、学際的交流・対話の意義を強調するものである。

また、『教育の今日と明日』のⅢ-2が「カトリック高等教育にとっての課題」であり、大学の独自性を踏まえて問いかけられた内容である。「Ⅲ-2.c. 大学、企業、労働市場」では、『カトリック大学憲章』第30項にある社会の善のための真理の探究を踏まえ、カトリック大学が「他者への奉仕のうちに希望を述べ伝え、正義と共通善へ深い関心を持つ人々を養成し、その人々が特に貧しく抑圧されている人々へまなざしを向けるよう教育し、責任ある世界市民として活動するよう生徒学生を導いていくという形でこの使命に貢献する」よう喚起される²³⁾。『カトリック大学憲章』第32項を引用した「Ⅲ-2.f. 変化と、大学のカトリック・アイデンティティに関する課題」でも、重ねて「批判的思考ができ、高度な専門性を持ち、また共通善に奉仕するスキルとしての豊かな人間性をも持ち合わせた男女の養成」を使命とし、「この使命に沿った研究、教育、そして多様な奉仕は、互いに絶え間なく対話しつつ大学教育を導くべき根本である。カトリック教育は、知識と人間性という二つの要素からなる成長を助けていく」と明言している。そこで、カトリック大学の教員は、「専門知識分断の克服、多様な学問領域間の対話の促進、知識の調和と一致の探求といった、なかなか解決しないながらも常に展開している事柄に対して独自の貢献をしていくよう呼びかけられている」という²⁴⁾。

2013年3月現教皇フランシスコが就任すると、同年11月には最初の使徒的勧告『福音の喜び』を發布した。大学については第134項に、「大学は、学際的かつ統合的な方法で福音化の務めを考え、発展させるためにとっても恵まれた場です。たえず福音の明白な告知と教育を結びつける努力をしているカトリック校は、文化の福音化に貴重な貢献をなしています」と、使徒的勧告のテーマである「福音」と直結されている。真理の探究に関連する項目としては第257項で、カトリック教会・キリスト教・宗教や信仰を超えた広い対話と連帯の呼びかけともなっている²⁵⁾。

『教育の今日と明日』の結論は、次の一節で締めくくられている。

聖霊によって一致し、多様な教育者が協働することは不可欠で、そのような共同体が育まれ励まされなければなりません。学校は仲介役であり、またそうならなければなりません。学校は出会いの場、教育コミュニティ全体の集中点とならなければなりません。学校の唯一の目的は、誠実で有能かつ実直、忠実さを愛することを知り、神の呼びかけに応答して専門性を社会への奉仕に生かす生き方を歩んでいける成熟した人間を育むことです。

ここでも、「専門性を社会への奉仕に生かす生き方」と人間的成熟が要請される。勉学・研究は、それ自体で自己完結、自己満足するためではなく、自己から「出向いて行く」もの、他者と社会への奉仕に向けられた成熟した人間となることが強調されている。

(2) 教皇フランシスコ使徒憲章『真理の喜び』

2017年12月8日、教皇フランシスコは、使徒憲章『真理の喜び（ヴェリターティス・ガウディウム）——カトリック大学と教会系学部の改革についての指針——』を発表した²⁶⁾。これは、翌2018年10月3日から28日まで「若者、信仰、そして召命の識別」をテーマとするシノドス（世界代表司教会議）が開催され、その成果を受けて、2019年3月25日に使徒的勧告『キリストは生きている』が公布された流れにもつながっている。『キリストは生きている』第222項に、『真理の喜び』に言及した部分がある。

カトリック校は、若者の福音化のためには欠かすことのできない場であり続けています。宣教へと「出向いて行く」学校や大学の刷新と復活のための使徒憲章『真理の喜び』で指摘した、ヒントとなるいくつかの基準点を考慮することが重要です。ケリュグマの体験、あらゆるレベルでの対話、専門をまたぐ学際性、出会いの文化の促進、「ネットワークを作る」緊急の必要性、底辺に置かれた人、社会が排除し廃棄する人を優先することなどです。ほかに、頭にある知識と、心、そして手による行為とを、一つに結ぶ能力も大切です²⁷⁾。

使徒憲章『真理の喜び』の大部分は、『カトリック大学憲章』同様、また副題の表すとおり、カトリック大学と教会系学部の改革に関する学問共同体・組織・教員・学生・各学部などの項目ごとに示された具体的指針である。序文に、それらの基礎となっている教皇フランシスコの考え方が記されており、以下に考察していく。

序文第1項、すなわち使徒憲章『真理の喜び』全体の最初は、「真理の喜びは、すべての人の心を、神の光と出会い、そこに住み、それをすべての人と分かち合うまでは平安を得られないものとする、胸を焦がすほどの願望を伝えます。真理とは抽象的な概念ではなく、それはイエス、命であり、人々の光である神のみことばです」という言葉である²⁸⁾。これは、教皇フランシスコ最初の使徒的勧告『福音の喜び』序文冒頭、「福音の喜びは、イエスに出会う人々の心と生活全体を満たします」を想起させる。この二つの序文冒頭の呼応から考えても、換言すれば、真理とはイエスその方であり、真理の探究とは、イエスとの出会いに至りその喜びを分かち合う営みといえよう。

第2項では、「神学、哲学、社会学、科学のさまざまな学問分野が、組織的な学際的交流によってともに行動しなければならない」と、ともすると縦割りになりがちな学問分野・領域を超えた交流、連携の必要を説く²⁹⁾。

第3項では、教会を「出向いて行く」宣教的なものへと変容させるため、「教会の学問は、……教会がイエス・キリストの出来事から現実を読み取るための一種の文化的実験室となるべきです」という。そのためにカトリック教会系の大学・学部の世界的なネットワークの貢献を呼びかけるとともに、学者・研究者の姿勢を問う言葉が印象的である。

哲学と神学は、開いた精神と、ひざまずく態度をもってのみ、豊かな実りをもたらします。完結

した思想に自己満足を得る神学者は凡庸であり、良い神学者・哲学者は開かれた考え、すなわち常に未完の、神と真理に開いた、常に発展する思考を持っています³⁰⁾。

第4項で、のちに『キリストは生きている』の中に言及された刷新と貢献のために必要な基準点が、解説とともに提示されている。「ケリュグマの体験、あらゆるレベルでの対話、専門をまたぐ学際性、出会いの文化の促進、『ネットワークを作る』緊急の必要性、底辺に置かれた人、社会が排除し廃棄する人を優先することなど」と列挙されたキーワードは、もとの『真理の喜び』では基準点4点の中に取り上げられていた言葉で、「底辺に置かれた人、社会が排除し廃棄する人を優先すること」は、第一のケリュグマの体験の中で扱われている。以下、その要点を把握していきたい。

a) ケリュグマの体験

第一の優先的、永続的な基準点は、ケリュグマ、つまりイエスの常に新しく魅力的な福音を、心の中で観想し、霊的、知的、実存的にとり入れていくことであり、肉となり、よりよいものとなるまで深めていくことです³¹⁾。

まず、最重要、最優先で永続的なこととして、ケリュグマ、イエスの福音を告知することが挙げられている。それも言葉だけではなく、現実の社会の中での実存的、体験的な告知、あらゆる人間同士での兄弟愛の実践である。さらに福音宣教の社会的次元として、教皇フランシスコが初の回勅『ラウダート・シ』のテーマにした環境問題・社会正義に及び、ここに「底辺に置かれた人、社会が排除し廃棄する人を優先すること」を含めている。

b) あらゆるレベルでの対話

第二の基準点は、信者であるかないかを問わず真の出会いの文化を促進するあらゆるレベルでの対話で、この項目に「真理（の喜び）」の言葉が使われている。この対話は、「真理の喜びを共同体的に体験するため」、また「その意義と実践的な関わりを深めるため」の本質的な要請で行われるもので、その際「真理が、対話を創り出すことばであり、相互理解と交わりを作り出す」と説く³²⁾。

c) 専門をまたぐ学際性

第三の基準点は、啓示の光に向かって、大学や学科を超えて専門をまたぐ叡智と創造性ある研究で、多様性における知識の統一という原則のもとでなされるものである³³⁾。

d) 「ネットワークを作る」緊急の必要性

第四の基準点は、教会系の研究を育て、推進していく世界中の種々の教育機関のネットワーク構築である。グローバル化し相互依存関係にある現代、「地球は故郷であり、人類はともに暮らす家に住む一つの民である」という確信が広がってきた。そして、連帯が、対立や緊張や抵抗の場に多様性の一致を実現しうるのであり、対立を前にしての最善の道は、「対立する両極がもつ豊かで有益な潜在能力そのものを維持したまま、高い次元での解決に信頼すること」であるとする³⁴⁾。

第5項は、いわゆる「文化の福音化」につながるものと考えられる。「福音宣教者の気遣いは、福音

を一人ひとりに届けるだけでは足りません。文化全体に福音を告げることです。……キリスト教神学と文化は、最前線で危険に晒されながらも、忠実に生きた時に、宣教の使命に値するものとなります」と述べる³⁵⁾。

序文最後の第6項では、宣教へと「出向いて行く」学校や大学の刷新と復活のため、継続的な挑戦を要請して締めくくっている。

わたしたちは、文化的、霊的、教育的な重要課題に直面しており、再生のための長い道に踏み出すようにとの要求を突きつけられています。カトリック系大学と学部も、今日の大きな文化的・霊的・教育的挑戦の中で、再生の長いプロセスを必要とします³⁶⁾。

以上が教皇フランシスコ使徒憲章『真理の喜び』序文の概要だが、教会で文書の名称となる冒頭句「真理」自体の使用頻度についていえば、序文の中に目立って多いわけではない。むしろ、教皇フランシスコの種々の機会の言行や文書全体に特徴的な「福音の告知・宣教」、「対話」、「出会い」と交流、特に異なる文化・宗教・学問間などいわばカベや境界線を越えて異質なものに「開かれている」、「出向いて行く」姿勢と、環境問題やいわゆる貧しい人の優先に傾注しているのがわかる。

教皇は、この後の2019年6月、「地中海をコンテクストとした『真理の喜び（ヴェリターティス・ガウディウム）』後の神学」をテーマとした神学会議（ナポリの教皇庁立南イタリア神学部）で公開講話を行っている。その中では近年続発している難民問題に触れつつ、「今日、地中海地域で起きている、時に悲劇的である諸問題に対応するために、平和の中に受け入れの精神と兄弟愛あふれる社会を構築し、誠実な対話を育む『受容の神学』が必要になっています」と、使徒憲章の具体化について述べた。また、福音宣教を中心に据えた教会研究を新たにするための重要な要素として、「対話」と「ケリュグマ——キリストの死と復活を告げ知らせること」の2つを挙げている³⁷⁾。

「対話」と「ケリュグマ」については、すでに就任翌年の2014年2月、カトリック教育省総会に際し参加者を通して教育機関に向けたメッセージにも組み込まれている。

第一の側面は教育における対話の重要性です。……実際、カトリック学校や大学で学ぶ学生・生徒の中にキリスト教ではない方や信仰をもたない方が多いという現状があります。……しかし、キリストのメッセージをすべての人に伝えることも同じように重要です。それぞれの教育機関の独自性やひとりひとりの自由を尊重しながらも、とりわけ、イエス・キリストは命、宇宙、歴史の根源であるというメッセージをもたらす使命があります。福音を述べ伝えるイエスの出発点は、「異邦人のガリラヤ」です。ガリラヤは、人種、文化、宗教が交差する場所でした。すなわちこの状況は、現代世界と相通じるものです。広く多文化社会をもたらした目まぐるしい変化は、大胆で刷新的な忠誠心をもちながら、学校や大学において交流と対話の教育プログラムを大切にする働き手を求めています。彼らは、多文化社会にあって、どこか違う「魂」と出会うカトリックの

アイデンティティーをもたらすことができるのです³⁸⁾。

ここでも、教育機関の役割をキリスト教の信仰者でない人々も含めた「多文化社会」での対話の場とし、かつ「魂」がキリストに触れるようメッセージをもたらす使命を第一の側面としている。さらに「後の側面」でも、「カトリックの教育機関は、この世界から離れては存在できません。それらは、すべての人に提供できる賜物を意識しつつ、現代文化と開かれた対話のアレオパゴスに、勇気をもって入る方法を探さなければなりません」と勧めている³⁹⁾。

もう一つ、関連する教皇フランシスコのメッセージを取り上げておく。2017年10月、大学の伝統と聖ドミニコにもゆかりのイタリア・ボローニャを訪問し、サン・ドメニコ広場で大学関係者らと集い、ボローニャ競技場では市民とミサをささげた。その大学関係者らとの集いにおいて、「大学、ユニベルシタスは、あらゆる学問とあらゆる共同体を包含し、知識欲を高め、研究を共同のものに広げながら、互いに興味を共有し、刺激を与え合う場所」と描写している⁴⁰⁾。そして、研究に関連して話した言葉が、真理の探究というよりも「善の追求」であり「愛」であった。また、今日の大学が持つべき3つの権利として、文化に触れ、知識を深め、人類と共通善に貢献する権利、不安や孤独、重苦しさを感ずる世において、ネガティブな論理に押しつぶされず、希望を持つ権利、紛争を超え一致を目指す平和への権利を挙げたという。

以上のことから、教皇ヨハネ・パウロ2世使徒憲章『カトリック大学憲章』で、大学の使命は真理の探究であると前面に打ち出したのとややニュアンスの違いを感じる。もちろん、「真理」とはイエスであり、ケリユグマを第一の基準に挙げていることに変わりはない。学際的交流や対話、社会貢献に関することも『カトリック大学憲章』から継続している。ただ、教皇フランシスコは、真理の躍動感とでもいべき側面、真理が固定、既定されたものではなく、開かれた対話と愛の実践の中から常に新たに見出され探究され続ける面を強調していると捉えることができるであろう。そして、30年の経年、グローバル化し、あらゆるネットワークが進化してきた世界・社会の変化とその時々の問題への対応が印象付けられたものになっている。

(3) 「頭・心・手の言語」——理論と実践

第1章でたどったように、ドミニコ会は、理論と実践の相互に支え合う働きをもつ二つの現実と対話しながら、真理を探究してきた。このドミニコ会の真理の探究は、教皇フランシスコが大学教育に要請することと符合する。2019年11月、バチカンで国際カトリック大学連盟主催のフォーラムが開催され、教皇は、参加している世界のカトリック大学の学長などリーダーと会見して語った。

教育全般、特に大学教育は、頭を概念で満たすことだけではありません。頭の言語、心の言語、手の言語の3種類の言語が必要です。私たちは、自分が感じていること、自分がしていることと

調和して考え、考え、行動していることと調和し、感じ、考えていることと調和して行動する必要があります。……指導者の養成は、大学の生活が知性だけでなく、「心」、良心を、学生たちの実践的な能力を合わせる形で発展させようとするときに、その目標を達成するのです。科学的、理論的な知識は、学者や研究者の感性と融合しなければならず、研究の成果は、専門的な訓練だけに関係する自己参照的な方法で獲得されるのではなく、関係的および社会的な目的を持っています。最終的に、すべての科学者と文化に関わるすべての人が、大きな知識を所有しているためにより大きな奉仕をする義務があるように、大学共同体、特にキリストの靈感を受けた共同体、そして学術機関の生態系も同じ義務を感じなければなりません⁴¹⁾。

メッセージのテーマは「大学には人々の心身の健康と環境問題に貢献する義務がある」ということだったが、ここに大学教育および研究における「頭・心・手」の言語の調和あるいは融合と表現されたことが、真理の探究における理論と実践の相互作用と一致するものと考えられる。そして、目標は必ず他者への奉仕に向けられている。

ドミニコ会 800 年の歴史、ドミニコとトマス、ラス・カサスとビトリア、シュヌとコンガールの場合においても、それぞれ生きた時代によって貢献すべき具体的な人々や社会の問題は当然ながら変化し適応に努めてきた。現代の大学共同体が頭の言語、心の言語、手の言語を駆使して取り組み寄与すべきことは、特に教皇が種々の機会にテーマとする「心身の健康と環境問題」であると鼓舞されている。

3 ドミニコ会の大学——真理の探究と福音宣教

(1) 大学における真理の探究と福音宣教

前章の中で、教皇フランシスコによる「真理」の語句の使用頻度について触れた。「真理」という用語自体についていえば、その使用が目立つ教皇文書に、教皇パウロ 6 世使徒的勧告『福音宣教』（1975 年 12 月 8 日）がある。「真理のしもべ」という見出しが付された第 78 項である。

わたしたちに託されている福音は真理のことばです。人を自由にする真理、また、それだけが心の平安を与えることのできる真理です。わたしたちがよい知らせを伝えるとき、人々が求めているのはこの真理です。それは神に関する真理、人間とその神秘的な運命に関する真理、世界に関する真理です、わたしたちは神のみことばのうちに難しい真理を探し求めています——繰り返していいますが——わたしたちは決して真理の支配者ではありません。わたしたちは単なる保管者、伝達者、しもべにすぎないのです。当然のことながら、各福音宣教者は真理に対して敬虔の念をもつべきです。彼が研究し人に伝える真理、それは啓示された真理、神ご自身である本源の真理の一部なのです。ですから、福音宣教者は自己放棄と苦しみの犠牲がどんなに大きくても、他人に伝えるべき真理をつねに探し求めなければなりません。人を喜ばすため、あるいは驚かせ

るため、あるいは創意や自説を示すためなど、どのような理由があっても、真理を裏切ったり隠したりすることは決して許されません。真理を拒絶したり、怠惰のため真理の探究をおろそかにしたり、あるいは自分の都合や恐れから、啓示の真理を曇らせることもできません。宣教者の務めは、真理の研究をゆるがせにせず、真理に仕えさせることではなく、自分が真理に仕える、ということ⁴²⁾。

この1項だけで「真理」の言葉が見出しを除き21回使われ、福音宣教者が真理の支配者ではなくしもべにすぎないこと、真理に対して敬虔の念をもち、他人に伝えるべき真理をつねに探し求めるべきことが説かれ、「宣教者の務めは、真理の研究をゆるがせにせず、真理に仕えさせることではなく、自分が真理に仕える、ということ⁴²⁾」と締めくくられている。真理の探究は福音宣教の前提であり、それには徹底した謙虚さが求められているということであろう。

『カトリック大学憲章』第30項で、大学の使命として真理の探究が明確化されていることはすでに言及した。第49項では、大学の教育研究活動と福音宣教との密接なつながりがうたわれている。

いずれのカトリック大学も、まさにそのカトリック性のゆえに、教会が行う福音宣教の仕事に重要な寄与をする。〈大学そのもの〉がキリストとその福音の生き証人なのであり、世俗化の波に覆われた諸文化、もしくはキリストの福音についてまだほとんど知るところのない諸文化にとって、その存在はきわめて重要である。さらに、カトリック大学が行う基本的なあらゆる学究活動は、教会の福音宣教とつらなり、調和している福音の光のなかで営まれ、新たな発見があればすぐさま個人と社会に役立たせようとする研究、信仰を下地にしながら、人々に理性的・批判的な判断力を与え、しかも人格の超越的尊厳に気づかせるような教育、倫理的価値基準と個人と社会への奉仕の精神とを加味した職業教育、信仰に対する理解を深める対話、信仰を現代人に分かりやすい言葉で伝える神学的研究などがそれである⁴³⁾。

ここには、「キリストの福音についてまだほとんど知るところのない諸文化」という、カトリックはもとよりキリスト教の信徒がごく少数の日本のような宣教国における意義も含まれている。キリスト教人口の少ない日本にありながら、カトリック・プロテスタントともキリスト教が特に教育・医療・福祉の分野で果たしてきた役割の大きさについては、すでに認められているところであろう。とりわけカトリック信者自体はここ数年44万人前後、人口の約0.34%とごく少数であるが⁴⁴⁾、2018年度日本カトリック学校連合会加盟の815校（幼稚園から大学）在籍者数は20万人余、プロテスタント学校の在籍者数はおよそ倍、合わせて約60万人が日本社会でキリスト教的世界観・人間観・価値観による教育を受けていることになる⁴⁵⁾。キリスト教的教育理念に基づいて社会に出る最終準備を担うカトリック大学が存在することは重要であり、個人の人格と社会への奉仕に向かう職業教育と種々の教育研究活動とともに、信者の教職員・在籍者が、少数ながらも「生き証人」になることと「分かりやすい言葉」

での福音宣教に寄与できることが期待されている。

では、他者への奉仕に向かう教育のために、またキリストの福音の「生き証人」になる養成のために、何から始めるのか。ヒントとして、教皇フランシスコが、日本の青年、大学生と話したいくつかの機会に質疑応答で一致していたテーマの一つ、「鏡を見ない」という観点がある。まず、2017年12月に上智大学で映像回線による対話「教皇フランシスコと話そう」の機会が持たれた。その際、「大学教育の目的で一番重要なものは」と問われ、「他人への奉仕の視点のない教育は失敗に向かいます。自分だけを見つめる教育は危険です」と答え、「宗教の重要性は」の問いにも、「あらゆる真の宗教性は人を成長させ、自分自身をも超越させ、他人への奉仕を教えます。神を礼拝し、他人に奉仕しないならば、キリスト者とは言えません」と答えている。そして、自分に対するイメージを聞かれての答えが、「鏡」に映る自分を見ないようにしているということであった⁴⁶⁾。

また、ローマ教皇の来日は38年ぶりという2019年11月の司牧訪問で青年との集いを持った折も、自分のよさや勇気に気づく助けについて、ユーモアを加えて次のように語りかけた。

成長するには、自分らしさ、自分のよさ、自分の内面の美しさを知るには、鏡を見てもしかたありません。……幸せになるには、ほかの人の助けが必要です。写真をだれかに撮ってもらわないといけません。つまり、自分の中にこもらずに、ほかの人、とくに、もっとも困窮する人のもとへと出向くことです。皆さんに一ついいたいことがあります。自分のことを見過ぎないでください。鏡ばかりを見ないでください。見過ぎて、鏡が割れてしまう危険がありますからね⁴⁷⁾。

青年期、学生時代に、いわゆる「自分探し」が続いている場合も多い。もちろん、自分を見つめ、ふり返り、自分の強み・弱みと可能性を追究し、いわゆる「自己を知る」ことが必要である。しかし、自己発見は「鏡」では始まらないし解決しないというのである。ここにいう「自分らしさ、自分のよさ、自分の内面の美しさ」、つまり自分の真・善・美は、他者との出会い、交流の中で見出され、また他者へと出向くためのものだということである。これは、カトリック大学での真・善・美の探究も含めた「真理の探究」にも言える。真理の探究は、いわゆる垣根を超えた出会い・対話・交流の中で新たにされ続け、福音宣教と他者への奉仕、特に困窮者への奉仕へと出向くことと密接なつながりがあるということであろう。そして、もし「鏡」を見るというなら、同じ「かがみ」でも伝統的に「キリストを鑑として」という「鑑」である。「真理である神を観想する」こと、自分を見るのではなく目標であるイエス・キリストを見つめることを通して、自分の現実、進む方向、生き方がおのずと見えてくるであろう。そこに、ケリュグマの重要性、福音宣教側の使命と責任がつながってくる——「わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています」(Ⅱコリント4・5)。

したがって、教皇フランシスコによる青年、学生の側への勧めもあれば、当然、教育者側への要請

もある。先にも言及したカトリック教育省総会参加者へのメッセージ中、第二の側面として述べたのが、教育者の本質的な育成、教育者の持つべき特質とその責務についてだった。「目の前にいる若者とコミュニケーションができる方法を見つけるように」という実践上の促しとともに、教育は愛であり、命を与えることであるという本質と、「優れた資質と合わせて、若者と共に忍耐強くこの道を歩み始めるという情熱」を喚起する。

カトリック学校における教育者は、何よりも有能でかつ適格者であることは言うまでもないことですが、それと同時に人間性豊かで、若者と共にあって、彼らの人間性と霊性を育む教育者でなければなりません。若者は、言葉だけでなく、証しを伴う価値観をもった質の高い教育を必要としています。若者を教育するにあたって不可欠な要素は一貫性です！ 一貫性！ 一貫性なしに教育も成長も不可能です、一貫性と証し！ ……一貫性は努力を要するものですが、それは何よりも賜物であり恵みです。私たちはそれを願い求めなければなりません！⁴⁸⁾

「一貫性」という用語も、教皇フランシスコがよく使うキーワードの一つといえる（教皇が母語として使うスペイン語で *coherencia*）。文脈から見て、たいていの場合が主張や論理の一貫性以上の「言行一致」に換言できる使い方である。

現代の学生、青年が混迷しているとき、種々のかたちでいわば生き方の十分なモデルが示されていないのではないかという要因も考えられる。「真理」と「一貫性」の説得力をもったモデルを見出していないか見失っているということである。「子は親の背を見て育つ」というが、いわゆる「大人の責任」もないとは言いきれまい。「大学生にもなって」とか自立とかを主張したくなるかもしれないが、感受性の鋭敏な青年期、とりわけ社会に出る最終的、具体的な準備となる学生時代、進路を模索する中で直接・間接に出会う人間像の影響は、良きにつけ悪きにつけ大きい。もちろん、家庭の問題もあろうし友人や先輩の影響を受けやすい時期でもあろうが、1日の大半を過ごす大学の場合では、教皇フランシスコのいう教育者の責務も大きいといえよう。

(2) ドミニコ会における真理の探究と福音宣教

ところで、「真理」というドミニコ会のカリスマもモットーも、当然のことながら、いわゆる「閉域」の外で活動する会員にも閉域内で観想生活をする会員にも共通のものである。ラドクリフ元総長は、特に会の隠世修道女に宛てた書簡中「真理の探求」の1章を設けて語りかけた。「真理への自己養成」の節の中では、大聖アルベルト・聖トマス・シエナの聖カタリナ等、会の聖人たちの言葉を引用しながら、真理の観想とは大部分が勉学を意味し、勉学によって真理であるみことばを愛することを学び、幸福に導かれることを説いている⁴⁹⁾。

また前出の書簡では、福音宣教に向けた勉学の中で真理の言葉を使う責任とその教育について述べ

ている。

神のみことばの奉仕者として、私たちは自分の言葉の力、癒し、或いは傷つけ、建設し、或いは破壊する力に深く気づいていなければなりません。……あらゆる教育、勉学の中心に、言語への深い尊敬、兄弟姉妹に接する際の言葉に対する感受性がなくてはなりません。……勉学は私たちが責任、自分が使う言葉に対する責任を持つようにと教育しなければなりません。私たちの言うことが真理に應えるものであること、現実と一致するものであることという意味における責任です。また、私たちがコミノテを建設する言葉、他の人々を育成する言葉、傷を癒しいのちを与える言葉を言うという責任もあります⁵⁰⁾。

以上の箇所は、ドミニコ会における修道会員の勉学・教育についてであり、大学での勉学に限ったことではない。全会員が初期養成から始まり日々生活する共同体や使徒職を中心とする生涯養成まで、場合によって大学での勉学や会の教育機関を含め、広い意味で行う勉学に適用される。真理の探究と福音宣教はいわば「生涯現役」の責務であり、「定年」も引退もなく、修道院の内と外もない。いつどこにあっても、「神のみことばの奉仕者」すなわち福音宣教者として「真理に應える」、「現実と一致する」責任が問われ、言行一致をもって福音を伝えることを学び続けるよう求められている。

中でも教育機関での関わりは、とりわけ前述のとおりキリスト教の信徒が少数の日本にあっては、重要な福音宣教の場である。もちろん、あくまでも信教の自由に基つき、教勢や信者の拡大を言っているわけではない。生産と消費・「使い捨て」・格差・競争等に特色づけられた社会の中で真理を探究し、福音のメッセージ、「真の幸福」、真の生き方のヒントやユニークな価値観を伝えることができるという意味での宣教の場である。場合によっては時流に逆らい、「負けた」ように見えても真の意味で「生きる」真の知恵を共に求める場である。

このことについて、ラドクリフ元総長在任中の書簡で次の部分を参照したい。

大学生は、しばしば私たちの社会の価値を反映します。大学生活の大部分は、生産と競争に基礎を置いています。あたかも私たちは知恵に達することを探求する代わりに自動車を製作するかのようです。大学は工場のようになり得ます。生産ラインからは製品が溢れ出、競争相手や敵は根絶させられなければなりません。しかし、私たちはもし別の神学、競争なく尊敬を伴った神学をしなければ、決して神について明るく輝く言葉を言うことはできないでしょう⁵¹⁾。

「大学とその草創期と今日における社会的役割」の講演の中でも、大学における真理の探究について次のように述べている。

私たちの大学は、宗教的原理主義に対抗し、地上で、社会の中で、関わりを持っていますか。難民や他の世界的な挑戦課題となっている人々を支えていますか、それとも象牙の塔に住んでいますか。人間は、真理を探究する本性的な傾向を持っています。大きな事柄においてだけでなく、

詩や映画やブログにおいても、真理がなければ、人間は衰えてしまいます。大学は、知性を教育するためのみならず、生産品を求めるだけの市場経済と闘うために存在しています。人間は、働くことなしには、子どもに贈り物を携えることもできず、毎日食べることもできず、生き延びることはできません。真理を探究することは、私たちと異なる人々のもとに達するための霊的な行為であり愛の行為ですが、私たちは世界の中心ではありません。私たちの社会は異質なものを恐れており、大学は、私たちと同じでない人々、異なる人々と関わるよう私たちに教えるべきでしょう⁵²⁾。

2020年1月28日、教会暦で大学の保護聖人トマス・アクィナスが記念され祝われる日、スペイン・コルドバにあるドミニコ会の教会で2人のドミニコ会士の講演が行われた。最初に、聖トマスが神学者・聖書学者としてばかりでなく偉大な福音宣教者として再発見されていること、聖書は神学・聖書学・霊性・倫理・哲学・社会学等も総合して理解されなければならないことが紹介された。続いて、神学者かつ画家であって、神の代名詞、真・善・美の証人ともいえるフェリクス・エルナンデスが、「対話し分かち合われる真理」をテーマに講演した。その中で、共有する真理の探究は対話の総体を通してなされねばならず、その対話は、兄弟も異なる人々も、住む社会、生きている文化、出会う異文化も含めたあらゆる人々との対話、全被造物との対話であり、痛み苦しみの現実を伴うものだと述べた。そして、真理の探究は愛すること、勉学は愛すること、私たちはより良く愛するために勉学し、真理の探究という冒険を歩むと結んだ⁵³⁾。

第1章で、ドミニコ会のカリスマである観想と活動の調和、また理論と実践の二つの現実と対話し相互作用させながら真理を探究してきた歴史、特に中世・近代・現代3つの時代の人物を見た。これから聖ドミニコの帰天800周年、また数年で第2バチカン公会議の開会から60年へと向かいつつある現在、新型コロナウイルス（COVID-19）の影響も顕著になった2020年以降、急激な変化の時代を迎えている。これまでの価値観が通用しないことや逆転も起こっている。ともに、真の幸福・共通善という目標に向かい、謙虚さと柔軟さをもって真理を探究し、理論と実践の相互作用、種々の分野・領域の学際的交流と対話に努めて「知恵を出し合う」ことによる社会への奉仕が課題である。

おわりに

ドミニコ会のカリスマである「真理」と聖カタリナ大学の建学の精神である「愛と真理」——創業者聖ドミニコの帰天800年の聖年に向け、あらためてドミニコ会およびドミニコ会の大学における「真理の探究」の使命について省察を試みた。考察を通して、理論と実践の相互作用による真理の探究、

現代の状況においてイエス・キリストのメッセージを伝える福音宣教、社会の諸課題に関して専門をまたぐ学際性と種々のレベルでの対話、ネットワークの構築、社会的弱者の優先等が、特に大学に要請されていることが明確になった。

現代の状況と言え、やはり新型コロナウイルスによるパンデミックが挙げられる。その流行が拡大し始めた頃からしばしば中世ヨーロッパのペスト流行が想起され、ドミニコ会では、ペスト患者を看護し聖カタリナ大学の保護聖人でもあるシエナの聖カタリナが著名である。聖カタリナ大学・同短期大学部は、各学科の教育研究活動に種々の資格取得を含んでいることもあり、講義と実習といった理論と実践の相互作用、多職種連携といった専門をまたぐ学際的交流や対話、社会奉仕などを具体的に醸成しうる環境に恵まれている。ところが、新型コロナウイルス感染拡大のために、実践のカギともいえる現場・臨地での実習、対人の直接的な交流が困難になっている。

イエズス会士の川村信三師は、今回のコロナ禍を、「会いに行ってはならない」との心を人々にたたきつけたという最も賢く恐るべき人類初の試練と述べている⁵⁴⁾。同じイエズス会士で医師でもあるミルズ・シーハン師は、「愛は言葉ではなく、行いで表すものだ」という聖イグナチオ・デ・ロヨラの言葉をもとに、「今は、社会的距離を置くことが、隣人を愛する具体的な方法の1つです」と強調した⁵⁵⁾。これはアメリカ・ジョージタウン大学主催のオンライン・フォーラムでの発言で、医療専門家、政治・経済の専門家、聖職者、中小企業経営者など500人以上が参加、事務局長ジョン・カーも、「私たちの信仰のさまざまな伝統は、今この時、覆されている。『安息日を守る』とは『家にいること』を意味し、『父親と母親に敬意を払う』とは『新型コロナウイルスに感染しないように距離を保つこと』を意味するようになっていきます」と語った⁵⁶⁾。また文学界でも、フランス・パリ在住の芥川賞作家・辻仁成が、新型コロナウイルスの脅威は、人と人を引き離す、人と人との関係を断ち切る、人間を分断させる破壊力であり、これまでの価値観や人間の結びつきを引き裂くのがこのウイルスの真の毒性、「人類から人間の本質である愛を奪う悪魔」だと表現している⁵⁷⁾。

従来ならばこれこそ「愛」、これぞ「真理」としていた内容が覆っていく現在の状況である。いわゆる「文字通り」や原理主義は通用しない。本稿では、知識としての真理と預言的体験としての真理との相互作用の歴史、また教会の各指針の中で、ケリュグマの体験、専門をまたぐ学際性と種々のレベルでの対話、ネットワークの構築、社会的弱者の優先等が大学に要請されていることを考察してきた。希望を絶やさないう⁵⁸⁾、まずは各自が置かれている身近な状況の中で、「愛」と「真理」が具体的に何なのか、大学共同体内外での連携のもとに探究し続けなければならない。

最後に、日本人ドミニコ会士押田成人師の言葉を借りて擲筆する——「私達が操縦不能のジャンボ機に同乗しているのだとしたら、私達はどうすべきなのか。そして世界情勢は、実際にそういう情況にどこか似ていると、あなたは思いませんか？」⁵⁹⁾。

脚注

- 1) ドミニコ会元総長ティモシー・ラドクリフ「大学とその草創期および今日における社会的役割」(国際会議『母校、大学のきのうきょう——ドミニコ会の800年と大学』2016年4月7-9日、サラマンカ大学)、以下、ドミニコ会ホームページ(スペイン語版)から試訳して参照。
<https://www.dominicos.org/noticia/los-dominicos-y-la-verdad/>
- 2) トマス・アクィナス『神学大全』II-II, q.188, a.6(竹島幸一・田中峰雄訳『神学大全』24、創文社、1996年、160-161頁)。なお、トマス・修道会・大学の関連テーマを扱った最近の著書として、山口雅広「トマス・アクィナスと托鉢修道会」、伊藤邦武他責任編集『世界哲学史4——中世II個人の覚醒』第2章、39-59頁、が興味深い。
- 3) 前掲ラドクリフ講演「大学とその草創期および今日における社会的役割」中に引用の表現で、スペイン語“*espiritualidad de ojos abiertos*”。フェリシシモ・マルティネス O.P.「現代世界におけるドミニコ会員とは」(マドリッドにて、2004年2月19日)岡本哲男 O.P.訳『ドミニコ会ロザリオの聖母管区再来日百周年記念文集』聖ドミニコ修道会ロザリオの聖母管区日本地区、2004年では、ドミニコ会的観想に関連し、「事実と歴史の奥底まで掘り下げ、そして信仰の目で、神の両眼を通してそれを見ること」(9頁)、「信仰の視点からそして神のレベルから現実と歴史を見ること」(10頁)、また「同世代の人々を見る目と聞く耳を預言者のように鋭くし」(14頁)と述べられている。
- 4) ティモシー・ラドクリフ O.P. 武田教子 O.P.訳「希望の活ける泉—勉学と福音の告知」(1995年11月21日)(『ドミニコ会士(説教者兄弟会第85代総長)ティモシー・ラドクリフ書簡集』聖ドミニコ女子修道会、2004年)、54頁。
- 5) 同上、53-54頁。
- 6) 同上、50頁。
- 7) 拙稿「ドミニコ会士 M・J・ラグランジュの預言的靈性——その生涯にみる神のことばと生活のあかし——」、聖カタリナ大学『キリスト教研究所紀要』第13号、2010年、参照。
- 8) 拙稿「人権擁護の先駆者ドミニコ会士ラス・カサス——その生涯の現代的意義——」、聖カタリナ大学『キリスト教研究所紀要』第2号、2009年、参照。
- 9) ラドクリフ「希望の活ける泉」、55-56頁。
- 10) 同上、56頁。
- 11) 同上、51頁。
- 12) 同上、51-52頁。
- 13) 山本耕平「トマス・アクィナス 総序」、上智大学中世思想研究所翻訳/監修『中世思想原典集成14 トマス・アクィナス』、平凡社、1993年、21頁。
- 14) 同上、21-22頁。
- 15) 同上、20頁。
- 16) 同上、20-21頁。
- 17) カトリック教育省『教育の今日と明日——新たなる情熱——討議要綱』(2014年4月7日)、日本カトリック学校連合会 海老原晴香訳/同 野田麻里子・明治学園長 メリー・ギリス校閲(教育機関への配付資料)
- 18) ちなみに、聖カタリナ女子短期大学の開学は1966年4月であり、カトリック大学や学部が世界各地に配置されるよう勧告したこの宣言が公布されて約半年後であった。
- 19) 『キリスト教的教育に関する宣言』10(『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』カトリック中央協議会、373-374頁)
- 20) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒憲章『カトリック大学憲章』30、上智学院、1991年、15頁。

- 21) 『カトリック大学憲章』 32、同上、16 頁。
- 22) 前掲『教育の今日と明日』、6 頁。
- 23) 同上、19 頁。
- 24) 同上、20 頁。
- 25) 教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』 134 (日本カトリック新福音化委員会訳・監修『福音の喜び』カトリック中央協議会、2014 年、119-120 頁)、同 257 (214 頁)。
- 26) 教皇フランシスコ使徒憲章『真理の喜び』(2017 年 12 月 8 日)
FRANCISCO CONSTITUCIÓN APOSTÓLICA VERITATIS GAUDIUM SOBRE LAS
UNIVERSIDADES Y FACULTADES ECLESIASTICAS
http://www.vatican.va/content/francesco/es/apost_constitutions/documents/papa-francesco_costituzione-ap_20171208_veritatis-gaudium.html、バチカン放送日本語版を参照しながら試訳。
- 27) 教皇フランシスコ使徒的勧告『キリストは生きている』(2019 年 3 月 25 日) 222 (カトリック中央協議会事務局訳『キリストは生きている』カトリック中央協議会、2019 年、147-148 頁)。
- 28) 前掲『真理の喜び』序 1。
- 29) 同上、2。
- 30) 同上、3。
- 31) 同上、4a)
- 32) 同上、b)
- 33) 同上、c)
- 34) 同上、d)
- 35) 同上、5。
- 36) 同上、6。
- 37) 「憐みの心と祈りがなくては、キリスト教的観点から現実を解釈する力さえも失う」—ナポリの神学会議で(2019. 6. 21)、バチカン放送、
<https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2019-06/papa-discoorso-convegno-teologico-napoli-20190621.html>
- 38) カトリック教育省総会参加者への教皇フランシスコによるメッセージ(2014 年 2 月 13 日 教育機関へ)
佐井総夫ホームページ http://w01.tp1.jp/~a287446192/C22_1.htm
- 39) 「アレオパゴス」は、パウロが異文化の中にあって対話を試みた丘(使徒言行録 17・16-34 参照)。
- 40) 「教皇、ボローニャ訪問、大学関係者らとの集い、市民とミサ」(2017. 10. 1 サン・ドメニコ広場～ボローニャ競技場)、バチカン放送、<http://ja.radiovaticana.va/news/2017/10/03/>
- 41) 「大学には人々の心身の健康と環境問題に貢献する義務がある」—国際カトリック大学連盟の指導者たちに(2019. 11. 4)、「カトリック・あい」<https://catholic-i.net/kotoba/>、「教皇のことば」2019 年 11 月 6 日のページ。
- 42) 教皇パウロ六世使徒的勧告『福音宣教』(1975 年 12 月 8 日) 78、日本カトリック宣教研究所訳『福音宣教』カトリック中央協議会、2006 年、99-100 頁。
- 43) 前掲『カトリック大学憲章』 49。
- 44) 「カトリック教会現勢 2019 年 1 月 1 日～12 月 31 日」、カトリック中央協議会ホームページ
<https://www.cbcj.catholic.jp/wp-content/uploads/2020/09/statistics2019.pdf> を参照。
- 45) 品田典子(日本カトリック学校連合会事務局長)「日本のカトリック教育にとって初体験の『新たなステージへの大転換期』に考える」、『福音と社会』第 300・301 合併号、カトリック社会問題研究所、2018 年、22 頁、参照。

- 46) 「教皇、上智大学の学生たちとビデオ中継で対話」(2017年12月18日上智大学で、映像回線による対話「教皇フランシスコと話そう」が行われた)『カトリック生活』2018年2月号、14頁、参照。
- 47) 「青年との集い(東京カトリック聖マリア大聖堂、2019年11月25日)」、『すべてのいのちを守るため 教皇フランシスコ訪日講話集』カトリック中央協議会、2020年、62-63頁。
- 48) 前掲、注32、カトリック教育省総会参加者への教皇フランシスコによるメッセージ(2014年2月13日教育機関へ)。
- 49) ティモシー・ラドクリフ O.P. 武田教子 O.P. 訳「山の上にある町は隠れることができない」(2001年4月29日)、『ドミニコ会士(説教者兄弟会第85代総長)ティモシー・ラドクリフ書簡集』聖ドミニコ女子修道会、2004年)、249頁、参照。
- 50) ラドクリフ「希望の活ける泉」、52-53頁。
- 51) 同上、50頁。
- 52) ラドクリフ「大学とその草創期および今日における社会的役割」。
- 53) <https://www.dominicos.org/noticia/felix-hernandez-conferencia-verdad/>
- 54) 『カトリック新聞』2020年6月7日付、4面、参照。
- 55) 「世界的拡大は『道徳的な試練』」一米でカトリック社会教説と新型コロナウイルス・フォーラム(2020.3.30)、「カトリック・あい」<https://catholic-i.net/>。
- 56) 同上。
- 57) 「生き抜こう、人類にはまだ希望がある 辻仁成さん寄稿」、『朝日新聞デジタル』2020年4月22日より。
 なお、希望にまでつなげている重要な該当部分をここに引用しておく。
 ……人々がいがみ合い、他者を排斥し、感染者が差別され、世界中が鎖国のような状態になって、不安と憎しみが助長され、ほくらは誰もが距離をとるようになり、その結果、笑顔が遠ざかった。全世界が力を結集させ、なんらかの新しい方法で、再び手を取り合って世界を創造していかなければならないというのに、新型コロナウイルスは想像以上に厄介で、ほくらはどんどん引き裂かれていく。その上、封じ込めるための治療薬もワクチンさえも無い。人が離れていけばいくほど、人間は孤独になる。つまり、このウイルスは人類から人間の本質である愛を奪う悪魔と言い換えることもできる。……日常を奪われたほくらがロックダウン下で一番守らなければならないことは「生活を失わない」ことだ。百年に一度のパンデミックと人類は遭遇してしまった。自分たちが生き残るためにほくらは支え合い、強い連帯感を持ち、生き抜こう……そうだ、人類にはまだ希望がある。
- 58) いわゆるコロナ禍を克服する希望に向けて、カトリック教会でも、教皇フランシスコが種々のメッセージを発し続けていることを付記しておく。以下を参照。
 教皇フランシスコ『パンデミック後の選択』カトリック中央協議会、2020年。また同年10月3日付の署名で、パンデミックも背景に、人類の兄弟愛と社会的友愛をテーマにした新しい社会的回勅 *FRA TELLI TUTTI* を発表した。
CARTA ENCÍCLICA FRA TELLI TUTTI DEL SANTO PADRE FRANCISCO SOBRE LA FRATERNIDAD Y LA AMISTAD SOCIAL,
http://www.vatican.va/content/francesco/es/encyclicals/documents/papa-francesco_20201003_enciclica-fratelli-tutti.html
- 59) 押田成人『地下水の思想』新潮社、1986年、200頁。押田が1985年8月12日の日本航空ジャンボ機墜落事故に触れ、「死に直面した状況の中で、人々の一番奥に隠れているものがときに浮かび出るということ、そして深い出会いが現成すること……墜落する日航ジャンボ機の中で、人々が励まし合い助け合ったこと、ある人々が遺書を認めたこと……最後まで冷静に最善を尽くした乗組員達の英雄的行動」について言及している文脈である。